

日本学術会議 科学者委員会
学術誌問題検討分科会（第5回）議事要旨

1. 日 時： 平成24年11月2日（金）16：00～18：00
2. 場 所： 日本学術会議 5-C（2）会議室
3. 出席者： 浅島委員長、北里副委員長、植田幹事、田口幹事、小松委員、北村委員、松岡委員、吉田委員、谷藤委員、玉尾委員、永井委員、林委員（欠席：嶋田委員、辻村委員、矢野委員、須田委員、長野委員、古田委員）
事務局：守屋事務官 他
4. 配付資料：
 - 資料1 前回議事要旨（案）
 - 資料2 国際発信力の強化案（谷藤委員）
 - 資料3 IUPAP WG on Communication in Physics 報告（植田委員）
 - 資料4 研究者からみたジャーナルOAについて（植田委員）
 - 資料5 MEDLINE 収録日本発行医学雑誌の発行耐性の解析とそのインパクトの変化（林委員）
 - 参考1 委員名簿
5. 議 事：
 - （1）前回議事要旨（案）を承認した。
 - （2）国際発信力の強化案：

谷藤委員より、委員長の依頼を受けて日本発学術誌の国際発進力を高めるモデル案が、資料2に基づいて説明された。国際舞台で日本のジャーナルがインパクトを持ち、ステータスを高めてゆくためには、ジャーナルの電子化に終わらず、世界の読者に印象づけ、魅力あるジャーナルとして強いメッセージを発信し続けることも必要である。そのためには、インターネット技術の急速なる進化に速度を合わせつつ、科学者の関心を引き寄せる仕組みが必要である。本提案モデルは、学術団体が集まりスケールを持って、日本の優れた研究内容を強調して、持続的に発信することを目的とした国際発信プラットフォーム構築の一例として示すものである。
 - （3）IUPAP WG on Communication in Physics 報告：

植田委員が、表記会合への参加報告を、資料3に基づいて行なった。会合では、open access, research などについて議論している。著者負担、機関負担を増やすことなしに、オープンアクセスを進める方向等が話題になった。
 - （4）研究者からみたジャーナルOAについて：

植田委員から、資料4に基づいて説明があった。研究者はさまざまな側面をもっているため、それに対応したOAが必要である。
 - （5）全分野にわたるわが国発の世界トップジャーナルを新たに作る可能性に関して：

全分野にわたるわが国発の世界トップジャーナルを新たに作る可能性について議論した。各学会、各分野で進めようとしている分野別リーディングジャーナルの動きを尊重し

競合しないこと、そのためにレビュー・コンセプト記事などが中心にならざるを得ないこと、しかしそれでは世界トップジャーナルにはなりえないのではないか、いずれにしても海外の商業出版社に依存せざるを得ないこと、など、前向きの意見は多くはなかった。これとは別に、「学士院紀要」を強化して世界クラスのレビュー誌にレベルアップする可能性についての意見もあった。

（６）MEDLINE 収録日本発行医学雑誌の発行耐性の解析とそのインパクトの変化：

林委員より、日本の学術誌の現状を示す例として、日本の医学誌の現状が紹介された。資料５参照。

（７）その他

次回日程と検討事項：

平成２５年１月２５日（金） １６：００～１８：００ 刊行物助成に関する科研費が変わった事について各学協会にアンケートをとり、その内容を SPARC News Letter に報告する。